

形容詞の意味と統語形式 (1)*

八 木 克 正**

はじめに

「形容詞型」(adjective pattern) という概念は「動詞型」(verb pattern) の概念ほど定着していないが、この用語が最初に使われたのは Hornby (1954)、でありこれは後に Hornby (1975) で改良された。Quirk *et al.* (1972)、Quirk *et al.* (1985)、Declerck (1991:480ff.) にも形容詞のパタンによる分類がなされている。生成文法の展開の中で、John is *eager* to please. と John is *easy* to please. の文が表面上はまったく同じ構造をしているのに、*eager* の文では主語が please という行動をするのに対して、*easy* の方は誰かが主語の John を喜ばせるという関係になっていることが明らかにされた。*easy* の文は It is *easy* to please John. の John を文の主語の位置に繰り上げる (raise) するという関係で John is *easy* to please. が成立しているが、*eager* は *It is *eager* to please John. といった構造がとれないことで *easy* と *eager* の違いが説明されてきた。

このようなことがきっかけになって、形容詞型の分類とパタン化が試みられるようになった。わが国では、大沼 (1968)、安井ほか (1976) が最も斬新な試みである。このような試みを概観するとともに、イギリスの学習辞典での形容詞型の認識についてもそれぞれの試みをあげてみる。そして、英語の形容詞の意味と統語形式の関係を明らかにし、形容詞の分類を試みる。

1 文法書などの形容詞型設定の試み

Quirk *et al.* (1972:821ff.) は形容詞の型を4つの主要なパタンに分け、そのうちのひとつをさらに2つに分けている。(型を表す記号は、以下にあげるどの分類も (A) (B) (C) ... で統一してある。) それらの型と、その型を代表する用例をひとつあるいは2つあげる。

(A) be + Adj.: John is (very) *bright*.

(B) be + Adj. + preposition phrase: He was *shocked* about her reaction.

(C) be + Adj. + *that*-clause

(C1) Human subject + be + Adj. + that:
I am *sure* that he is here now.

(C2) It + be + Adj. + *that*-clause: It is *true* that she never came.

(D) be + Adj. + to VP: He is *splendid* to wait.
安井ほか (1976:205ff.) も基本的には Quirk *et al.* (1972) にそったものであり、また Hornby (1975:139ff.) の分類も基本はこれらと変わるところはない。

これらに対して、Quirk *et al.* (1985:1220ff.) は前置詞句をとるか、*that* 節をとるか *wh* 節をとるかなどと、分類を補文構造だけによっているところが特徴である。

(A) Adj. + preposition phrase

(B) Adj. + *that*-clause

(C) Adj. + *wh*-clause

(D) Adj. + *than*-clause

(E) Adj. + to VP

(F) Adj. + *ing*-participle-clause

*キーワード：叙述形容詞の分類；形容詞の意味；形容詞のパタン

**関西学院大学社会学部教授